

東洋学研究所（サンクトペテルブルク）による 仏教文献の収集

Ⅰ・F・ポポフ
佐藤裕子 訳

ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部の莫大な写本コレクションは、一七二四年にアカデミーが創立される前から、徐々に、かたち作られていました。歴史的な公文書や写本・文献の収集は、私たちの国では古くから始まっていたのです。それらの最初の保管場所は、教会や修道院、そして貴族の——後には皇帝の宝物庫でした。⁽¹⁾一八世紀には個人によるコレクションが大きな意義をもっていたのです。やがて彼らの収集物の中に、歴史や芸術に関係する物と並んで、東洋の諸言語で書かれた書物が、さまざま

な経路によって入るようになりました。

ロシアは、その地理的位置と歴史的運命により、東洋と西洋の間に位置する国家です。かつてロシア民族は、テュルク系民族と活発に交流しており、ロシアの国家体制と生活習慣に対するキプチャク・ハン国の影響は著しいものでした。ロシア人は一四世紀初頭から、東方へ段階的に移動し、他民族と接触する領土を広げ始めました。そこでは、さまざまな文化的・社会的・宗教的な伝統が共存し、織り交ざり、徐々に溶け合っていました。また古代および中世において、アジア

や北アフリカの民族とロシアとの交易や政治的關係が作られ、東洋諸国に関する情報が少しずつ蓄積されていきました。それらは主に、必要欠くべからざる實際的要求や、宣教目的によつて命じられたものでした。

ロシアと東洋の關係において質的に新しい段階が始まったのは、一八世紀初頭です。それまでは、關係諸国の言語と慣習を知る必要に迫られての「實際的な東洋学」だったのが、人文科学の一基礎部門としての「学術的な東洋学」が形成され始めたのです。ピョートル一世の勅令により、一七〇〇年と一七〇二年にロシアで東洋諸語の教育が導入され、それと並行して、將來の研究のための基礎資料として、アジア諸民族の生活習慣や礼拝の対象の情報、および書物の収集が盛んになりました。

一六九七—一六九九年に西ヨーロッパ諸国を「大使節団」とともに旅したピョートル一世は、積極的な収集活動を行い、あらゆる学問分野の書物を含む多大な収獲をもたらしました。ピョートル大帝の膨大なコレクションを保管するため、一七一四年に図書館と博物

館が設立されました。この帝室図書館の基礎をなしたのが、モスクワから運び込まれた皇帝の蔵書および医務庁の書籍と写本でした。一七二四年に科学アカデミーが設立されてから、図書館と博物館は、アカデミーの所轄になりました。⁽²⁾その後、ロシア科学アカデミーの蔵書は、常に補充されてきました。⁽³⁾

仏教的内容をもつ最初の写本と書物がロシアのコレクションに登場したのは、一七二〇年代です。ゲルハルト・フリードリヒ・ミュラー（一七〇五—一七八三）とペーター・シモン・パラス（一七四一—一八一二）が収集した、チベットの書物や、当時の呼び名でタングート（西夏）の書、またモンゴルの書について、ロシア科学アカデミーの案内書初版の編者であったI・G・バクメイステルは、次のように語っています。「図書館には、金や銀、そしてインクで書かれたおびただしい量の西夏やモンゴルの文字が収められている。しかし、これらの言語を知らないために、彼らに関するその後の情報を得られないでいる……。記された文字の多くが、発見されたシベリアから一七二〇年に送られてきた。

アブライ・ハーンによってイルトゥイシ川岸に建てら

れ、そして彼を側近とともに国から追放した彼の兄によって破壊された古代寺院アブラインキイデ（アブライ・ハーンの名をつけた寺院）で発見されたのである⁽⁴⁾。中央アジアから科学アカデミー図書館に入ったチベットの語およびモンゴル語の書物の大部分が、仏教的な内容のものでした。このことは、モンゴル民族の居住区域で最も広まっているのは仏教文献であり、したがって入手しやすかったことで説明されます⁽⁵⁾。

一七三〇年、ロレンツ・ラングが入手した中国からの初めての書物が、アカデミー図書館に納められました。その後、アカデミー所蔵の中国語および満洲語の書籍は一貫して拡充されてきました。まず辞書、儒教の古典的作品、歴史、地理や自然科学の内容の作品です。それから同様に、宣教師であるイエズス会士たちの著作もありました。極東の仏教に関する最初の資料がヨーロッパの学問に登場したのは、ヨーロッパの聖職者たちの著述の中なのです。彼らにとって、仏教の考え方を理解することは、宣教師としての使命を遂行

するために必要だったわけでした。

一七六六年のA・I・レオンチエフによる目録「科学アカデミー図書館所蔵の中国と満洲の書籍に関する目録。アレクセイ・レオンチエフ外務省書記官収集によるコレクション」⁽⁶⁾に掲載された中国語・満洲語書籍二三五冊の中で、仏教関係の書物は以下のものだけです。『41…満洲語で書かれた仏教僧のダルマ（法）に基づく徳行と悪行への広報（四冊の冊子）』と『130…自身の神から戒律を受けるための西方辺境への仏教の高僧の旅。中国語で西域記と名付けられる（二巻本）』⁽⁷⁾。

一八一八年に（サンクトペテルブルク支部の前身である）「アジア博物館」が組織された後、科学アカデミーは東洋諸語の書籍を、ここに移転し、その後はここへアジアからの書籍を送るようになりました。残念ながら、アジア博物館に送られてくるものは、詳細な説明が付いているとはかぎりませんでした。多くの書籍には以前の持ち主や収集家の印が残っておらず、そのため各作品がたどってきた運命を調査することは不可能のようには思えません。

一八一—一九世紀初頭に最初の関心が寄せられたのは何だったかと申しますと、保管されている各書物の記録や資料から見て、それは東洋諸国に関する全般的な知識を与えてくれる辞書や、文法、歴史、地理、イデオロギーに関する著作だったと結論できます。アジア博物館は、この目的に向かって収集に携わる研究者グループを形成しながら、研究対象としての文字資料の整理を始めたのです。

アジア博物館にあるサンスクリット語、中国語、モングール語、チベット語の仏教文献と写本は、P・L・シリング・フォン・カンシュタット（一七八六—一八三七）の二つの大きなコレクションから成ります。これらの収集品がもつ重大な意義は、すぐさまロシアの学者たちによって指摘されました。一八四一年にアジア博物館付属図書館の中国部門の目録を作成したマリイ・イヴァノヴィチ・ブロッセ（一八〇二—一八八〇）の報告書には、こうあります。「しかしながら、これまでアカデミーの中国コレクションには、特筆すべきものは何もなく、学術団体が設立されたのは、個人の資力

の限界を越えて、その収蔵物を限りなく増やすために有利だからのだが、その趣旨にふさわしいコレクションは何もなかったのである。しかし、一八三六年と一八三八年、まるで何かの魔法によるかのように、中国コレクションは突然、前代未聞の豊かな段階に躍り出た。そのため現在は、パリ王立図書館——ここは、新たな管理者スタニスラフ・ジュリエンが集めた書籍によって所蔵品が著しく増加した——を除いて、我々の図書館は疑いもなく、この種のヨーロッパの他の図書館すべてを凌いでいるといえる」⁽⁸⁾。

P・L・シリングの第一コレクションの部分的目録が、東洋学研究所サンクトペテルブルク支部の東洋学古文書室にある「シリング蔵書」に保管されていました。それらは基本的に、中国で書籍を購入したシリングの特派員たちによって編集されたものです。⁽⁹⁾ P・L・シリングと協力者によるそれぞれの記録は、これが素晴らしく系統だったコレクションであることを証明しています。ここには総計二〇〇〇冊以上の東洋の書籍があります。中には、ヨーロッパのどのコレクシ

ヨンにも見られない書物の唯一の版もありました。⁽¹⁰⁾

P・L・シリングのコレクションの補充の多くは、北京のロシア正教宣教師団のメンバーであり、シリングに収集を依頼されていたP・L・カメンスキー、N・I・ヴォズネセンスキー、Z・F・レオンチエフスキー（一七九九—一八七四）、D・S・チェスヌイ、M・D・シパコフ等を通じて行われました。シリングの収集には、中国語、満洲語、チベット語、モンゴル語の辞書、百科事典、儒教の古典、歴史、地理、哲学、数学、天文学、自然科学や医学に関する書籍があり、地図や、カトリック宣教師たちの神学的業績も含まれていました。コレクションは二八六点を数えました。⁽¹¹⁾

P・L・シリングは一八三〇年、彼の第一コレクションを国家に譲渡しました。それは、サンクトペテルブルク大学に東洋諸語学部の設定が計画されていた頃でした。もっとも、めぐり合わせによって、その書籍は大学の図書館には納められず、一八三六年に皇帝ニコライ一世によってアジア博物館へ渡されたのですが。シリングは、一八三一—一八三二年のシベリア調査の

直前でしたから、おそらく蔵書を売ることによって新しい補充のための資金を得られると期待していたのでしょう。その後、シリングの第二コレクションは、同様にアジア博物館に納められました。このコレクションは、第一コレクションをはるかに凌ぐ分量で、四八〇〇巻以上ありました。コレクションの目録を作成したのはY・I・シュミットとN・Y・ビチュリンです。シュミットはチベット・モンゴル部門を担当し、ビチュリンは中国語、満洲語、日本語と韓国語の作品を担当しました。⁽¹²⁾

アジア博物館のコレクションは一八三五年、ロンドンで、D・スチュアートの九五点のインド写本が加わり補充されました。このコレクションは、一八世紀後期に北インド各所で見事に製作され精査された写本のうち、多種多様なジャンルのサンスクリット文献を含んでいました。⁽¹³⁾ V・P・ワシリエフ（一八一九—一九〇〇）は、一八四〇年代に北京で収集した、主に仏教的内容をもつ中国語、モンゴル語、チベット語の写本や版本を譲渡しました。⁽¹⁴⁾ 特に彼からは、一一—一二世紀の

古いネパールの書体で一九世紀に書写された『法華經』⁽¹⁵⁾が納められたのです。

一九世紀を通じて、中国語の仏教書や写本がアジア博物館のコレクションに入ることはきわめてまれでした。一九二〇年ころ、V・A・アレクセーエフは次のように記しています。「仏教文献は、登録されている（中国の『ポボワ注』蔵書全体と同じ運命を逃れることができなかった。（中略）そのため、明の規範にのっとりた優美な出版物を所有しながらも、古いコレクションは全体として不十分なものであった。最近になってようやく博物館は、完全な規範と、日本の出版社で発行された見事な書物により莫大な補充を得た。大衆的な仏教は、普陀山の僧院の出版および街頭商人たちの本リーフレット、絵により紹介されている」⁽¹⁶⁾。アレクセーエフが念頭に置いている『大日本校訂訓点大藏經』は、一九一〇年代の日本で出されたもので、何冊かの仏教辞書・仏教関連書とともにO・O・ローゼンベルクによってアジア博物館のために入手されました⁽¹⁷⁾。

ドルジ・バンザロフの目録によると、一八四八年の

時点でアジア博物館には八三点の満洲語書籍があり、そのうち一〇冊が仏教に関するものでした。⁽¹⁸⁾

一九世紀を通じ、二〇世紀初頭まで、科学アカデミーのコレクションは成熟を続けました。アカデミーと外務省アジア局の方針に従って、個人による、そして逝去した東洋学者の相続人による自発的な寄贈が推進された結果です。また、筆写した書物の交換も行われました。アジア博物館の図書室を何度も利用したフランスの中国学者スタニスラフ・ジュリエン（二八四五年からロシア科学アカデミーの準会員）は、筆写した本の交換によって、この図書室を中国資料で補充したのです⁽¹⁹⁾。とりわけ彼からは、『佛祖綱目』の不完全な写本が納められました。その後、二〇世紀になってから、この伝統を、もう一人の卓越したフランスの学者ポール・ペリオ（一八七八―一九四五）が引き継ぎました。

一八五五―一八五七年ころ、アジア博物館に、カザン宣教団のコレクションが譲渡されましたが、大部分が仏教文献でした⁽²⁰⁾。一八六四年には、外務省アジア局から莫大なコレクションがもたらされました。

一八八〇年代からアジア博物館に、現在の中華人民共和国の新疆から資料が入り始めました。サンスクリット語、ウイグル語、サカ語、トカラ語、チベット語で書かれた第一千年紀（西暦一年～一〇〇〇年）の写本コレクションです。これは、N・F・ペトロフスキー、N・N・クロトコフ、A・A・デイヤコフ、V・I・ロボロフスキー、I・P・ラヴロフといった、ロシアの学者や外交官たちにより収集されました。⁽²¹⁾こうした写本は、仏教文献や經典の断簡でした。それらは、アジア博物館の中央アジア蔵書館でもあった現・東洋学研究所サントペテルブルク支部に収納されました。

一九〇二年、アジア博物館には、G・T・ツイビコフが、アンボ僧院および中央チベットのクンプム、クンデリン、カンデンその他の町に滞在中に集めた最も価値の高いチベット書籍（三三三巻）のコレクションが加わりました。まもなく、クンプムとラブランから、同じくらい貴重なB・バラジインのコレクションが届けられました。⁽²²⁾一九〇七年に、日本語で書かれた仏教説話や、（中国・唐代の『訳注』『南海寄歸傳』などのP・

A・ドミトリエフスキーのコレクションがアジア博物館に入りました。一九一〇年、A・ゴシユケヴィチの書籍とともに、アジア博物館入りしたのが、『増補諸宗佛像圖彙』と『淨土宗回向文和訓圖會』です。N・P・ザブーギンのコレクションとともに、一九一一年にアジア博物館に入ったのが、写本『正法山の六祖伝』（正法山六祖傳）でした。

科学アカデミーの収集活動の新しい段階は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての中国や中央アジアへのロシアの学者の活発な探検活動と結びついています。V・I・ロボロフスキーとP・K・コズロフによるトルファンへの遠征（一八九三―一八九五年）では、ウイグルおよびシリアの古代の物品と東洋の写本断片を入手し、これはA・O・イワノフスキーとS・F・オルデンブルク（一八六三―一九三四）が研究対象としました。⁽²³⁾これらもアジア博物館に納められたのです。一八九九年に、ロシア皇帝の庇護のもと「中央・東アジア研究ロシア委員会」が設立されました。委員会の課題は、ロシア人と外国人による探検の組織化と支援でした。

この委員会の委員長となったのがV・V・ラドロフであり、副委員長がS・F・オルデンブルクでした。

委員会によって「第一次ロシア・トルキスタン遠征」

の準備に関する決定が下された時点で、現在の新疆地域を以前訪れた探検隊からの報告書は何も刊行されていませんでした。そのため、サンクトペテルブルクでは、「計画的な作業を一体どこで行うのか」という問題を解決することが困難だったのです。探検隊は、一九一〇年八月二二日に、カラシヤル地方のシクシンで作業に取りかかり、そこで仏教僧院の遺跡が調査されました。発掘作業はさらに、トルファン、クチャでも行われ、その結果、一〇カ所ほどの地上および洞窟の仏教寺院が調査されました。探検隊が持ち帰った資料は最初、ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館に送られ、第一次の処理が行われました。一九三一—一九三二年にはエルミタージュに引き渡され、ここで一九三五年に資料の一部が展示されました。資料からは約一〇〇点の写本が見つかり、これらはアジア博物館に入りました。

一九一〇年にS・E・マロフによって発見され、アジア博物館にもたらされたのが、またとなく貴重なウイグル語写本『金光明經』でした。これはその後出版され、その一部はV・V・ラドロフによりドイツ語に翻訳されました。

一九一一年にアジア博物館入りをしたのが、一九〇七—一九〇九年にゴビ砂漠で西夏の死の町カラホトを発見したP・K・コズロフ（二八六三—一九三五）の探検によるコレクションです。このコレクションは、基本的にタングート人の死語（西夏語）で書かれた資料からなり、同時に中国語の文献も多く含んでおりました。サンクトペテルブルク支部の西夏語コレクションは、現在約六〇〇〇の写本と版本を数えます。その中には、經典、論書、戒律といった仏教文献が数多くあります。その大多數が、中国語およびチベット語からの翻訳です。オリジナルの西夏語の仏教作品は、チベット語の手本を模倣したものであり、中国の史実を扱っている道徳談²⁴です。カラホト出土の中国語資料の中に、二八三の仏教文献がありますが、そのほとんどは、簡潔で

わかりやすく教義の基本を述べている小經典です。⁽²⁵⁾その他の經典は数が少なく、三一点であり、その中に一点の『法華經』があります。そのうちの九点は印刷物として一一四六年に出版されたものであり、六点はさまざまな時代の写本の断片です。この中でも最も初期のものは七世紀後半の写本であり、一点は一一世紀末、二点は一四世紀中期のものです。⁽²⁶⁾

S・F・オルデンブルクの「第二次ロシア・トルキスタン遠征」(一九一四—一九一五年)の成果は、敦煌千仏洞から得た九—一一世紀の写本と断片による有名な「敦煌コレクション」です。これは、最小の断片を含めると約一万九千点にもなります。約四〇〇点の完全な巻物は、この地域の住民からS・F・オルデンブルクが入手し、諸断片のほうは、考古学的発掘によって洞窟内で発見されました。そのほか、サンクトペテルブルク支部の「敦煌コレクション」には、S・E・マロフのホータン遠征(一九〇九—一九一〇年)による数点の写本と、N・N・クロトコフが収集した一連の写本が加わりました。

この「敦煌コレクション」の多くは仏教僧院の蔵書の一部であり、仏教教義を述べた八〇種以上にわたる文献群ですが、その多くが写本でした。コレクションには、經典への注釈、正典外の書物、仏教説法の記録、また祈祷や儀式のテキスト、仏教儀式に関するその他の作品があります。

敦煌コレクションに芸術作品が最初に入ったのは一九七〇年代初頭のことでした。絹や紙に描かれた七一点の作品は、修復と展示のため、国立エルミタージュ美術館に移されました。美術館には、S・F・オルデンブルクの「第一次ロシア・トルキスタン遠征」によってもたらされた芸術作品が一九三一—一九三二年から置かれています。判別が難しい状態の聖像の断片の修復を、一九七〇—一九八〇年に、M・L・ルドワヰブチエリナが成し遂げ、現在、同美術館で展示されています。一九九二年から二〇〇一年にかけて、サンクトペテルブルク支部の敦煌コレクションのほぼすべての写本が、上海の古籍出版社から刊行されました。全部で一七巻の『ロシア所蔵の敦煌文獻』が出版された

の⁽²⁷⁾です。

東洋学研究所の大きな新収集のひとつを紹介します。

それは、二〇世紀初めに中国からロシアへ運ばれたことが明らかな中国の写本が、一九三五年にソ連科学アカデミー極東支部から当研究所に移されたことです。これらの写本は、はじめ国立極東大学の図書館に入り、そこから一九三二年にソ連科学アカデミー極東支部へ移されました。その後、レニングラード（現・サンクトペテルブルク支部）に届いたわけです。このコレクションから中国画集の多くの巻がノヴァ（NOVA）蔵書に入りましたが、これは特別な価値があるものです。その中には、仏教教義のテーマの物語や絵が描かれた色彩豊かな一八世紀の五巻本が含まれています。⁽²⁸⁾

アジアの諸地域からサンクトペテルブルクに収集された、諸言語での仏教文化の写本・版本は、現在、世界にあまり例を見ないユニークなコレクションのひとつとなっています。一九三〇年にアジア博物館は、新たに設立された「ソ連科学アカデミー東洋学研究所」の一員となりました。この研究所は、活動の基本方針

のひとつとして、全職員とコレクターによる「所蔵古写本の出版」を掲げていました。以来、五〇年の歳月の中で、「ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部」つまり現在の「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部」の研究者グループの努力によって、所蔵写本のカタログ作成という課題は、ほぼ完全に克服されたのです。所蔵写本の完全なカタログ作成は、科学アカデミー図書館およびアジア博物館の歴史全体を通じて、ずっと焦眉の問題だったのです。最初にこの問題が提起され記録されたのは、図書館司書のヨハン・ダニール・シユマヘル（一六九〇—一七六二）との約定書（一七二四年）です。彼に命じられたのが、「図書館および博物館を管理すること。図書館および博物館を秩序正しくすること。図書館では書籍のカタログを、そして博物館ではさまざまな収集物のカタログを作成すること」⁽²⁹⁾だったのです。

その後、一八一—一九世紀を通じて、コレクション各部門の部分的目録が作成され、カタログで内容を紹介する記述も試みられました。しかし、蔵書の完全なテ

「マ別目録については、一九五〇年代中期によく包括的に構想されたのです。この構想に従い、サンクトペテルブルク支部の所蔵写本のほとんどすべてについてのカタログが作成されました。そして現在、その出版事業がほぼ完遂されましたが、これは、版本や写本文献を明らかにする上で重大な意義をもつ事業であります。そして、今後の全面的な研究を可能にした事業なのです。

注

- (1) T・V・スタニコヴィチ、サンクトペテルブルク科学アカデミー博物館(クンストカメラ)。モスクワ、レニングラード、一九五三年、七頁
- (2) M・I・ラドフスキーは、サンクトペテルブルク・アカデミーのコレクションの構成と意義に関するG・F・ミユラー(一七〇五—一七八三)の興味深い証言を引用している。一七三一年にイギリスを旅行した際にG・F・ミユラーは、ロンドン王立アジア協会総裁のG・スロアンにより収集され、その後大英博物館の基礎となったコレクションと蔵書に巡り合っていた。後にミユラーは次のように記している。「その遺言の中で、自身の至宝を、指定された価格でロシア女帝が優先的に入手できるよう提案した彼(スロアン)は、一七五三年初頭に老齢でこの世を去った。あるいは、この提案は必要なかったかもしれない。なぜなら、博物学に関する資料や芸術作品のペテルブルクコレクションは、申し出を受け入れる必要がないほどすでに一杯だったからである」(M・I・ラドフスキー、一七三二年サンクトペテルブルク・アカデミーへの中国からの客人の来訪・東洋諸国における科学と技術の歴史から、論文集、II号、モスクワ、一九六二年、八五頁) 帝室科学アカデミーの歴史のための資料、一卷(一七一六—一七三〇)、サンクトペテルブルク、一八八五年、一八二、一八四、一八七、一九一、一九四、二〇八頁
- (3)
- (4) (I・G・バクメイステル)、帝室サンクトペテルブルク自然科学アカデミーの珍品と歴史の蔵書と資料室に関する経験。フランス語では、図書館副司書ヨハン・バクメイステルにより出版。ロシア語への翻訳は、ワシーリイ・コステイゴフによる。サンクトペテルブルク、シュラフタ海軍幼年学校の印刷所で印刷。一七七九年、八七頁
- (5) L・S・プチュコフスキー、序論、東洋学研究所のモングル写本と木版。一卷、モスクワ、レニングラード、一九五七年、一頁
- (6) ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部の東洋学古文書室、書庫一五二、目録二、九

番、一一四頁・裏面

(7) 同、一一四頁・表面

(8) M・I・プロツセ、帝室科学アカデミーアジア博物館
中国蔵書に関するアカデミー客員会員プロツセの報
告、三頁

(9) ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテル
ブルク支部の東洋学古文書室、書庫五六、目録一、一
二番・書庫五六、目録一、一一五番、一一八頁、五
七―五八頁・書庫五六、目録一、一二三番

(10) L・I・チュグエフスキー、バーヴェル・リヴォヴィ
チ・シリリング、蔵書の概要、No 152、ロシア科学ア
カデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部の東
洋学古文書室。I・F・ポボワによる発表と出版。東
洋の古文書。No 1 (四)、二〇〇六年、二五九頁

(11) Catalogue des Livres Chinois, Japonais, Mantchous,
Mongols, Tibetains, Tonquinois, Sanscrits etc. de la
Collection du Conseiller d. Etat actuel Baron
Schilling de Canstadt / ロシア科学アカデミー東洋
学研究所サンクトペテルブルク支部の東洋学古文書
室、書庫一五二、目録二、三〇番

(12) L・I・チュグエフスキー、バーヴェル・リヴォヴィ
チ・シリリング、二六二頁

(13) V・S・ヴォロビヨフ・デシヤトフスキー、ソ連科学
アカデミー東洋学研究所のインド写本コレクション
、／ T・K・ポソワ、K・L・チジコワ、ロシア

科学アカデミー東洋学研究所のインド写本の小カタロ
グ、モスクワ、一九九九、九頁

(14) D・I・チーホノフ、アジア博物館の至宝とその収集
家たち。(歴史概論)／人類学・民族学博物館集。
XXIV。アジア諸民族の文化。レニングラード、一九
七三年、一三頁

(15) ロシア科学アカデミー・アジア博物館案内小冊子、ペ
トログラード、一九二〇年、八八頁

(16) 同、五四頁

(17) 同、七二頁

(18) D・バンザロフが作成した帝室科学アカデミーアジア
博物館所蔵のモンゴル語の書籍と写本のカタログ。
(Lule 31 mars 1848)／ロシア科学アカデミー東洋
学研究所サンクトペテルブルク支部の東洋学古文書
室、書庫一五二、目録二、一〇番、一七頁・裏面―一
八頁。内容は以下の通り。

«VII. Религия буддийская. I. Маньчжурские
переводы разных буддийских книг, на продолговатых
листах. I связка, в которой содержатся: а) *Вачур-и
лахагара сурь-и чарьдэ дайинь-дэ акунха номонь*.
«Книга, режущая ваширом (алмазом) и достигшая
до противоположной стороны познания». Перевод
Ваджрангаджки; б) *Сувань шидзинь-и да бакши Дункаба
Далай джигьлоринь, адистит хурднь бахобурз эбурингэ
номонь*. «Книга под заглавием: молитва Даме Дзунххабэ,

главному учителю Желтой веры, доставляющая счастье

и благословение»; с) *Манджушри-и-матань*.

Похала Манджушри; d) *Майдари-и-форобунь*. Молитво-
обращение к Майтрее; e) *Шидьямунь-фучиси-и*

мактань, *адистид-и-онного догонь*. «Хвала Будде

Шакьямуни и путь к его благословению»; f) *Мохоень агу*

джатадунга-фучиси-и-дэцэтэри-урэбуну-гунирэ номонь

токтохо. «Книга размышления пред Бесконечно-

Блаженным Буддою (Амитабой)»; g) *Мохоень агу*

джатадунга-фучиси-и-бое-дэ-урэбуну-гунирэ номонь

токтохо. «Книга духовного размышления о существе

Бесконечно-Блаженного Будды»; h) *Эндрингэ-эйтэнь*

эхэ-бандзинь-бо-биратай-гэтрэмбурэ-дэцонного-умэжи

этэхэ-энэ-гэбунгэ-токтобойнэ-тарни-номонь-токтохо.

«Книга тарни, именуемого Победоносною матерью,

которая совершенно избавляет (читателя) от разных

переждений в низших классах существ»; i) *Умэжи*

эфулэрэ-вацир-гэбунгэ-токтобойнэ-тарни-токтохо.

«Основной тарни, именуемый весьма разрушающий

алмаз». 2. *Хинь-и-токтобоха-син-ли-гао-юнь-и-битэ*.

«О счастливых и несчастных днях». 1 том. (Неполный

экземпляр)»

(19)

L・N・МЕНШКОФ、L・I・ЧУГУЕФУСКИ、中
国学、／アジア博物館—ソ連科学アカデミー東洋学
研究所レニングラード支部、モスクワ、一九七二年、

八三頁

(20) L・I・プチコフスキー、序論、一頁

(21) M・I・ヴォロビヨワ＝Дешагтофスカヤ、ロシア科

学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部

の東洋写本コレクション、／東洋の古文書。No. 1

(四)、二〇〇四年、二四九頁

(22) V・A・ボゴスロフスキー、チベットの写本と木

版、／ソビエト連邦最大の図書館の東洋蔵書、モス

クワ、一九六三年、五七頁

(23) N・I・ペ트로フ、一九世紀末から二〇世紀初頭の東

洋学者たちと旅行家・地理学者たちの学術関係

／東洋の国と民族、I号、一九五九年、二六〇頁

(24) Z・I・ゴルバチョワ、タングートの写本と木版、／

ソビエト連邦最大の図書館の東洋蔵書、モスクワ、一

九六三年、五一—五二頁

(25) L・N・МЕНШКОФ、カラホト出土のコレクションの

中国部門の目録 (P・K・コズロフ蔵書)、モスクワ、

一九八四年、九頁

(26) 同、一七頁

(27) 俄藏敦煌文献、上海、一一七卷、一九九二—二〇〇

一年

(28) A・V・マラクエフ、ソ連科学アカデミー極東支部図

書館の中国写本のカタログ、ウラジオストック、一九

三二年、一一—三頁

(29) 同、一四頁

(I・F・ボボワ／ロシア科学アカデミー東洋学研究所

サントペテルブルク支部所長)

(さとう ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)